田中克彦著

ことばと国家

岩波新書

175

田中克彦著

ことばと国家

岩波新書

175

田中克彦

1934年兵庫県に生れる
1963年一橋大学大学院社会学研究科修了
専攻—言語学，モンゴル学
現在—一橋大学教授
著書—「草原と革命—モンゴル革命50年」
「草原の革命家たち—モンゴル独立への道」
「言語の思想—国家と民族のことば」
「言語からみた民族と国家」
「ことばの差別」

ことばと国家　　岩波新書(黄版) 175

1981年11月20日　第1刷発行 ©

定価 380円

著　者　田中克彦

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan

目　次

一　「一つのことば」とは何か……一
二　母語の発見……三五
三　俗語が文法を所有する……五三
四　フランス革命と言語……七七
五　母語から国家語へ……一〇七
六　国語愛と外来語……一三九
七　純粋言語と雑種言語……一四七

八　国家をこえるイディシュ語……一六九
九　ピジン語・クレオール語の挑戦……一九七
あとがき……二二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　「一つのことば」とは何か

言語と方言とのちがいがどこにあるかを言うのはむつかしい。方言であっても、それによって文学が書かれれば言語だと呼ばれることがある。ポルトガル語やオランダ語がそうであるように。

――ソシュール

ことばを持つ人間と持たない人間

人間はふつう、だれでもことばを話している。それは、人間と他の動物とを分ける基本的なめじるしの一つと考えられている。つまり動物分類学上の人間の位置は、ホモ・ロークエンス（「話す」人）というところにある。しかし、それは、肉体の上にあらわれた行動という面からみると、なるほど、舌、くちびる、のどなどという同じ道具を用いて音を発するという点では一致しているが、その行動によって製造されたオトが、たがいのあいだで理解できるかどうかという点になると、それらを一つにひっくるめて「ことば」と呼ぶにはためらいがある。というよりは、いま、ここに述べたようなやりかたで、まず、ヒトという動物の種類に共通な「ことば」というものを、あらかじめ設けてから話をすすめるのは、歴史の順序からいえば逆になる。それぞれ理解しあえない、何やらわからぬオトの連続であるが、それもやはり、その話し手たちにとってはことばなのだということがわかるまでにはずいぶん時間がかかっている。

ギリシャ人は、ギリシャ語を話さぬ他のすべての民族のことをバルバロイ（バルバロスの複数形）と呼んだが、それは「どもる者」という意味であった。「どもる」と言われる行動の定義

はともかくとして、ここで言おうとしていることは、なにか口からオトが出てはいるが、そのオトはまともなことばになっていないという判断である。すなわち、バルバロイとは人間ではあるかもしれないが、ギリシャ人の目からするとことばをしゃべらない人たちのことを指したのである。すなわち、ギリシャ人にとっては自分たちの話していることばだけがことばであって、その他にことばはなかったのである。言いかえれば、ギリシャ人にとっては、ギリシャ語すなわちことばであると同時に、ことばすなわちギリシャ語だったのである。その上、論理はギリシャ語をもってのみ語られるのであるから、ギリシャ語そのものが論理である。だから、ギリシャ語を分析すれば、そのなかから真理があらわれ出てくるのであった。

自身たちのことば以外にも、意味は通じないが、ことばがあるという認識があらわれるには、西洋の伝統としては、ローマの時代まで待たねばならなかった。ローマはすでに、それに先んずるギリシャ語の古典世界に対していただけでなく、そのなかに多くの民族のさまざまな言語を含み込んでいたから、自分たちの言語が唯一のものだとはもはや思えなくなっていた。

ロシア人も、他のことばに対してはギリシャ人と同じ態度をとったらしいことは、現代のロシア語のなかにまでその記憶がとどめられていることからわかる。ロシア語では、ドイツ人のことをネーメツと言う。これはネモーイ(おし)ということばから出ている。ロシア人からみて、

ドイツ人は何やら口を動かしてさえずってはいるが、それはことばではないと思われていたらしいのである。現代の日常語のなかでも、ドイツ人は「おし」と呼びつづけられていることは、過去の言語意識の生きた化石と呼んでもいい例であろう。

こうしたことがらを考えてみると、ことばを話すのが人間という認識はそんなに古くはないということがわかるであろう。

しかし、人類間の交流がすすみ認識が深まってくると、あるグループの話しているのも、自分たちのと同様にひとしくことばであるということがわかってくる。それらは翻訳しさえすれば理解しあえるというところまでに認識がすすんでくる。その段階に達すると、いったい、ことばはいくつあるのだろうか、それらはたがいにどこがちがうのだろうかという問いがたてられるようになる。

ことばの数をかぞえる

このように、言語の多様さという認識を大いにすすめたのは、多言語を支配地域内に擁する大帝国とか、人類のすべてに神のことばを伝えねばならなかったキリスト教の宣教師であった。こうして一六世紀以降、さまざまな異なった言語の見本をあつめた「博言集」が出されるよう

になった。これらの博言集が世にひろまり、多数の言語があるという知識を一般的にしたのは、もちろん印刷術の助けがあったからである。ロシアにおいては、ピョートル大帝からエカテリーナ女帝の時代にかけて、二〇〇をこえる異なる言語を比較対照した資料が集められた。その事業をそそのかしてすすめたのは、ことばにたいへん関心の深かったライプニッツであった。

それから二〇〇年を経た今日、科学はいったい、この地上にいくつ言語があるかを告げることができるだろうか。人によっては、それを三〇〇〇くらいと言ったり、いや六〇〇〇にも達するであろうと言う人もいるが、いずれにせよ、その数はきわめて大ざっぱなものである。ときにフランス・アカデミーが、かつて二七九六と自信たっぷりな数字を出したが、そうした数はとても永くもちこたえられるものではない。というのは、その後、世界のいろいろな場所で、ある言語の最後の話し手が亡くなったという報告が寄せられれば、そのたびにことばの数も減っていくからである。

しかしおそらくは、どうやら減るよりは増えるほうがずっと多いように見える。というのは、ことばはほろびる一方でなく、新たに作り出されてもいるし、そのうえ、まだ調査されずに残っている未知の言語がいくつもあるからである。人間は他の天体の上にまで足跡をとどめるようにはなったけれども、この地上のことはまだまだわかっていないようだ。とりわけ、ことば

の調査をはばむ要因はいろいろある。

いま日本では、いかに多くの人々が外国語の研究にたずさわっていることだろう。英語を筆頭に、その数はおびただしいものにのぼるにちがいない。しかし、ある言語には何千人、ことによると何万人もの研究者をひきつける力があっても、別の言語は一人の研究者をも持ち得ないということがおきる。個々のことばの研究にはそのようなかたよりがあるし、また多くのことばをかかえていながら、見捨てられたように残されている地域がある。

こうした地域のなかでも格別に有名な場所の一つにニューギニアがある。この島だけで、ある人は五〇〇から七〇〇の言語の存在を予想し、ある人は一〇〇〇に達するかもしれないとさえ見ている(「普遍要素と類型論研究」モスクワ、一九七四)。これらの言語は、いくつにも分れた部族の、それぞれの固有の言語であるが、そういう、文字も文明もないドジンのことばを研究して何になるのかとたいていの人は考えるだろう。ところが言語学にとってはなかなか有用なことがある。それは、たとえば見かけはぱっとしない昆虫や植物の新種の発見によって、進化の過程の重要な空白が見事に埋められるばあいにもたとえられるであろう。しかしそれだけにとどまらないのは、ことばが社会という個性的な環境を持っているための特別の関心による。世俗における有用性と学問における有用性とはちがうということは、どんな学問についてもある

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

程度は理解されているとはいえ、言語学にとって不幸なことは、およそ何かのことばを学ぶ動機がいつでも、そのことばが使えるようになるという、ひとえに実用性にあるということだ。言語学というのは、本来実用性を動機としていることばの研究に、それを無視してアプローチするという矛盾した姿をさらけ出している。とはいっても、そこにありさえすれば、手あたりしだいにどんなことばでも調べてみるというのではない。研究者がそういうことばの研究に、ことによると一生を棒にふってしまうほどの時間をかける決心に至るには、ある程度見通しのある動機にむすびつけられているのである。

いずれにせよ、ニューギニア島の言語状況をしらべただけでも、すぐにことばの数は変ってくる。人の精神には弱いところがあって、何かきちんとした数字が示され、それが教科書などに印刷されると、やっと落ちついた気分になって安心できるというところがあるが、そのきちんとした数を出したとたんに、じつは言語学は言語の本質をとらえそこない、あるいはみずからウソをつき、人を欺くエセ学問に転落してしまうおそれがある。

ここまで述べたかぎりでは、言語の数を確定する困難の本質的な理由にまで、まだたどりついてはいない。それは対象に近づくための外的困難であって、言語そのものの本質にやどる困難ではないからである。最大の困難は、どういうふうであれば、あることばが一つのことばと

して勘定できるのか、言いかえれば、ことばという単位とはいったい何かという問題になるのである。

琉球語か琉球方言か

「ことばとは何か」というありふれた問いは、もっとていねいに言いかえると、「一つのことばとは何か」でなければならない。いま日本語と朝鮮語とについて見ると、それらは別のことばで、それぞれが、一つのことばと一般に考えられている。それは、学問的であれ政治的であれ一般的な知識としてそう考えられているだけではなく、それぞれのことばのごくふつうの素朴な話し手が、たがいにそれぞれのことばを話してみて、やはり別のことばだと双方が認めあうだけの根拠をもっている。

しかし、たとえば琉球語と日本語との関係はどうであろうか。私のばあい、中央日本式に妥協しないできちんと話された琉球方言は、ほとんど、いや全く理解できない。多少わかったような気になるとすれば、そこは日本の一部分であり、そこのことばは日本語の方言だと、前もって偏見を注ぎ込まれているからである。同じ日本語を話しているのだと言われてもほとんど理解できないとき、私たちは、あれは外国語だなどと冗談めかして言うことがあるけれども、

日本語ならわかると思っている私にとって、わからなさの点において琉球語は外国語(同然)なのである。

しかしこうした言いかたは、琉球人、もしくは沖縄県民の感情をひどくそこねることもあるだろうし、あるいは逆に歓迎されることもあり得よう。琉球が政治的、文化的に日本の不可分の一部であると信じ、とりわけアメリカの占領下にあった時代に、日本への復帰を強く願った人たちにとって、日本語とは別の琉球語を考えることは、その復帰運動を妨害するものだという印象を与えることになろう。おそらく琉球語という表現すら、日本との分離の画策に荷担するものだと非難されかねない。それはあくまで日本語に属する一変種、すなわち、鹿児島方言などと同じ場所にならぶ琉球方言であるとその人たちは主張するであろう。

つまり、あることばが独立の言語であるのか、それともある言語に従属し、その下位単位をなす方言であるのかという議論は、そのことばの話し手の置かれた政治状況と願望とによって決定されるのであって、決して動植物の分類のように自然科学的客観主義によって一義的に決められるわけではない。世界の各地には、言語学の冷静な客観主義などは全く眼中に置かず、小さな小さな方言的なことばが、自分は独立の言語であるのだと主張することがある。

たとえば、埼玉県よりまだ小さいルクセンブルクでは国民の大部分にあたる約三〇万人が、

ドイツ語によく似た方言、あるいはことばを母語としている。このことばは、外国人であってもドイツ語にある程度堪能であれば十分意志が通じる。だから無邪気な人がやってきて聞いたら、これはドイツ語だと思ってしまう。だからといって、あなた方の話しているのはドイツ語だと言ったら、ひどく相手の気持を傷つけることがある。かれらは、ドイツ語とははっきり別の、固有のレッツェブルギッシュを、すなわち、ルクセンブルク語を話しているのだと言い張り、ついに、初級学校の授業科目として、隣接国の言語であって自国の公用語でもあるフランス語、ドイツ語と並んで、ルクセンブルク語の授業を導入しようかというところまでこぎつけている。

もし、言語学だけからみた尺度を、いわゆる中国語という一大方言群にあてはめるならば、漢系民族だけのなかに、二〇も三〇もの独立言語をもった独立国家を誕生させねばならないであろう。しかし、相互に会話が通じないほどへだたった言語でも、そこでは漢字という共通の文字でつながれており、意識としても、たかだか方言関係の差であるとしか感じられていない。その背景には、漢民族の一体イデオロギーが支えているからである。方言をおおいかくす文字の役割はあとで扱うイディシュ語においても強くあらわれているが、ここで心にとめておきたいのは、言語学にとっては、その第一歩において、何がことばかという、まず研究対象の設定

というところで大きな困難につきあたるということだ。

言語の呼び名

そもそも、ある言語のことを言おうとするとき、それは言語以外の名によってしか呼ぶことができない。おかしなことに、ふつう言語の名は言語そのもののなかからは出てこないものなのである。たとえば日本語というとき、それは、日本という国を本拠としていて、同時に日本民族の話すことばとして指されている。したがって日本語のばあいは、国家の名と民族の名と、そこで用いられる言語の名と、これら三つのものが一致している。これは中程度から比較的小規模な国家のばあいにみられるタイプである。

しかし、アイヌ語を例にとると、アイヌ国家は現存しないのであるから、このことばの呼び名の根拠は、それを話すアイヌ人とかアイヌ民族にある。このタイプに属するのは、国家をもたない、いわゆる少数民族のばあいであって、中国やソ連のような多民族国家内には、この種の言語が多数話されている。「中国」とか「ソ連」とか「アメリカ合衆国」とかの国家の名には、こうした少数民族の名はもちろん、その国家を担う主要民族の名も一つとして示されていない。その国家の名に複数の民族名をあげためずらしい例は、チェック民族とスロヴァキア民

族との連邦共和国であるチェコスロヴァキアくらいのものである。

中国とソ連を比較して論ずるばあい、国家の機構に大きなちがいがあるので区別しておかねばならない。中国はその全土が不可分の一体とされているのに対し、ソ連では、それを構成する一五の各共和国の主要民族の言語は、それぞれの「国家の言語」の地位を与えられている。各共和国内のさらに下位の自治共和国の言語も、その領域内では形式上は国家の言語である。

ある民族は国家を持ちうるのに、他の民族が国家を持ち得ないのは、みずから望んでそうなっているのではない。中国内にはチベット民族、モンゴル民族、ウイグル民族など、高度な文化と歴史と固有の言語をもつ民族がいて、しかも独立の国家を形成する力を持ちながらそうしていないのは、かならずしも望んでのことではない。わがアイヌ民族にしても同様であって、アイヌ人の現状は、アイヌ人の意志によるものではない。アイヌ語社会はもしかして失われてしまったと言い得るかもしれないが、アイヌ語そのものはまだ立派に生きのびているから、条件さえととのえば、アイヌ語社会の回復は不可能ではない。現にイスラエル共和国では、ヘブライ語が何千年もの眠りからよびさまされた。またさらに、アイヌ語にはヘブライ語のように、書きことばの厚い伝統がないと言う人がいるかもしれないが、あとで述べるように(第八章)、そんなことは克服できないほどの致命傷ではない。言語さえあれば、それがどんな言語であれ、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com